

# 九、和田久太郎

— 俳句 —

幡州明石の生れ、不運な生活を續け、株屋の小僧となり、抗夫となり、車夫となり、賣文社に入り、後大杉君等と運動を共にするに至つた。一個のサンザカリストを出でなかつたとするも、最も熱心な活動家で、久板卯之助君と共に大杉の兩腕と稱された。

大正十三年九月一日、本郷燕樂軒前で、大杉君等の仇敵と目される陸軍大將福田雅太郎をピストルで狙撃して果さず、捕へられて、無期徴役となつて秋田在監中、『もろくの腦も消ゆる雪の朝』と云ふ辭世一句を残して本年三月縊死を遂げた。

彼の文集『獄窓から』は昨年労働運動社から出版、殊にその俳句は文壇諸家の賞讃をうけた。

## ▽ 俳句

市ヶ谷から

半紙など買ひたり菊も匂ふ今日  
煙突の中程見えて秋の晴

長き夜や鼠が鳴けば鳩も鳴く

下駄の音は新入りか知らず虫の聲

獄中閑語

朝日影一尺ばかり漏れにけり  
飢え狂ふ態に吹雪の鴉かな  
髯剃るや雪照り返す壁の前  
あの霜が刺さつてゐるか痔の病  
壁見ても寒し血の湧く爪の跡  
誰が家の落葉が窓に飛んで來し  
世の態は如何に窓外菊枯れぬ  
秋の蠅がまじく俺の顔を見る

句屑片々

塀外の焚火の煙り懐かしき  
塀外や見えねえ見ゆる焚火顔

涕や見交す樹には霜雫

牢格子は月、鐵窓は雪にこそ

冬空や獄屋の笛のかすれがち

癖づきて額の皺や冬の雲

茶の湯氣に春の近づく日出哉

澤庵もや、黄色なり春近み

小田原はさぞ千鳥の夜海の音

春はまだ來ぬか爪垢たもと藁

鐵窓三昧

粥腹の一しほうららうらら哉

陽炎や欠伸の泪落ちてなほ

長閑さが淋し過ると鳴く鶏か

鶏の聲霞んで眼には塀の苔

きらりぼたり雫す春の重み哉

やあ君も髻落としたか衣更

光る眼がぎつしりと五月曇り哉

愕然と夢の醒むれば大蛾かな

跳ね狂ふ蚤も嬉しき旦那かな

桐の花のあせ行く雨と眺めけり

五月雨れて囚人髻がまた戀し

朝冷へに座すれば藍の香りけり

出廷の腹叩く朝の雲涼し

金網の目を抜けて會ひに來た蠅ぞ

新らしき手拭の糊や柵の花

桐咲くや隣りも借りる糸と針

踏み鳴す足下へ落つ一葉哉

一葉から眼を上げて豁と歩みけり

秋風や浴槽に泛く鳩の羽根

朝の月に鳥渡るなり丈夫也

面白や蜻蛉日和を編笠で

秋風や古禪も贈られず

虫の夜の露店を戀し我が身かな

古下駄は地虫が鳴いてくれるべし

虫聴くや仁丹の舌水甘く

酒のことは訊いてくれるな虫今宵

秋雨を饒げられる別れ哉

見納めの街は秋雨晝灯

さらば鳩よ朝寒顔をこちらむく

冷やかな雨にいや澄む眼かな

刑場の樹立はあれか雨の虫

その巨鵬大晴れを祈りけり

死別れ生別れつゝ飛ぶ雁か

秋田から

雪水雨吹込む窓を頼みかな

眠る蠅除けて煤掃く男かな

元日も曇り／＼と啼く鴉

元日やたゞ啼く鴉呀ゆる雲

暮近く淡い初日を拜みけり

水ばなや冷々として骨を滴る

湯婆を抱いて更に愚とならん

獄中にて

一椀の鹽茶待たるゝ氷雨かな

水暗く映る眼玉を寒むみけり

ふと閑けさの雪がこぼれた桶の水

老母を包む冬の光線の濁る塵

日の影やこころ疲れに足袋干しつ

古雪の雨夜の獨り按摩かな

屋根の雪のとぎろと落ちて揺るゝ陽や

春の空を見て泣き止んだ大きな眼

空へひたと顔つけて春を讃ひけり

## 十、小西次郎

——獄中消息——

大阪ギロチン社の一員、他の同志と共に、運動資金調達にあせるの餘り、罪強盜殺人に及び、小阪の銀行員である叔父をその行金を運ぶ途上に襲ひ、トランクを奪はんとして果さず、同志古田は遂に短刀をもつて之れを刺した。大正十二年、河合、中濱、古田其他の諸君と共に捕へられ、十五年の春無期の言渡をうけて何處の獄へか送られた。

友人、親族の上に強い愛情を持ちながら、偶然にして尊族親殺害の罪にとばれた年若い彼は永久にこの社會に立つことは出来まい。

英、佛語を解し、勉強家であつた。

### ▽朝會社に行く時の様に絞首臺に上りたい

昨日の手紙で『もし死ぬる様な事にもなれば美しく死んでくれ給へ』とありました。僕は、此間うちの手紙に僕の生に對する盲目的な希望の方面をあまり書き過ぎたから、さうかすると貴方は僕がもし死刑になればさうなるだらうと私の心持に對して一種の氣遣ひを感じて居られはし

ないかと思ひます。

無論もし生きるならば、あらゆる情熱を、あらゆる燃え上る本能の衝動を自暴くそに、死んだつもりで仕事と書物との中に集中して、不自然極まる監獄生活の悪い影響と闘つてやらうといふ一種の頑とした反逆的精神を強く持つては居ますが、死に對しては充分に充分に考へて居ます。私はもし死刑になつたとしても、此間、死んだ古田の様に静かな『透徹した朗かな心持』この語は彼が獄中からの手紙に書いて居ます」といふ様な境地に入る爲めに静かに生の執着を減ずることに自分を導こうとは思つて居ません。亦昔から多くの闘士連が斷頭臺上で叫んだ様に、『お、自由よ、自由よ』とか、『自分は死んでも……』とか『永遠の何んとかを信んずる』とか云ふ様な事を叫び乍ら死にたいとも思ひません。

僕は、やりかけた仕事も、讀みかけた本もその儘にしてポツクリと殺されたいといつても思つて居ます。

死ぬんだ、死ぬんだ等と朝から晩迄考へる事は馬鹿らしい事ですからね。敢へて、その思ひを拂ひのけ、その暗闇に眼を閉ぢ様と云ふのではありませんが、僕等は死刑にならなかつたとしても、いつ死ぬやら分らないんでしよう。

私は、永生も信じなければ、正直な所、社會主義者や、無政府主義者のユートピアが来る事も

信じては居ません。私の知つて居るのはたゞ人生は、宛然黒い穴へのやうに死に去るものだと云ふ事だけです。

私は殆んゞ何等の御祭騒ぎも無く朝會社へ出勤する時のやうに絞首臺に上りたいものだと思つて居ますし、亦それは可能だと信じて居ます。

僕の今迄の生のうちでなつかしく貴く思へるものは、そして今後も、もし許されゞば生きる爲めにあらゆる努力を惜しむまいとする一つの原因は、愛です。暗闇の世界のなかで私を魅して微か乍ら生きる道を照らしてくれるのは、愛の温かさだけです。私の貧しい食ふに困つて居る年老いた両親が、私と兄貴とあとにも先きにもたつた二人の子供を奪はれ乍ら、それでも云ひ難い親の愛の火を私の頭に置いてくれることの思ひと、私の周圍に見出す、友人達の愛とです。私はこれ等の愛の爲めにのみもし許されるならば、あらゆる力を盡して生きて行かうと思つて居ます。

併し安心して下さい。死なねばならない時、私は必ず微笑み乍ら死んで行きませう。

私がこうした心持で死んで行くなれば私を愛してくれる人々は皆んな喜んでくれるだらうと思つて居ます。

ズツと前、管野すが子が死刑の云ひ渡しを受けてから英語の單語を記憶する努力をして居た、といふ事が、嘘か本當かは知らないが兎に角僕等の連中で口に上つた事がありました。今の私は

その話のプロバビリテイを感じます。

僕の今居る監房のならばは死刑確定囚の非常に多く入れられる所で、僕は此處へ來てから随分多くの死刑囚を見送りました。何人つて一寸數へられない程、僕が此處へ來た大正十二年の暮に日本橋のお福殺して有名な『恵下田』とかいふ碁の上手な、青年を初めとして、女の事から七人の一家族を斬つた歐洲航路のボーイだの、小學校の助教員だつたと云ふ廿三四歳の紅顔の美青年だの、深い印象を残して行つたのも少なからずあります。

これ等の話は恐らく今書いても『不許』になつて出す事は出来ないだらうが、兎に角、これ等の人は私に死をしみんゞと考へさせてくれました。

その上私の兄貴は肺病で醫者に見離されてからも幾年にもなるので、兄貴と死とを離して考へることが出来なくなつてからも随分な月日が過ぎて居ます。

結局、皆んな同じ事でしょう。

さつちだつて同じ事ぢやないかといふのが落ちてしよう。